

# ドレミの起源《聖ヨハネ讃歌》をめぐって

坂崎 紀

## 1. 《聖ヨハネ讃歌》

現在、広く音楽演奏や音楽教育の場で用いられている音名あるいは階名としての「ドレミファソラシ」は、中世に成立したローマ・カトリック教会(以下、カトリック)のグレゴリオ聖歌、《聖ヨハネ讃歌 Ut queant laxis》に由来する。

譜例1a は、ミサと聖務日課のためのラテン語聖歌集 *Liber Usualis* (初版 1903) に掲載されている、4線譜表、角形ネウマによる楽譜である。この聖歌集はソレム修道院が 19 世紀末に編纂し、第2バチカン公会議(1962-65)以前の時代、カトリックで広く用いられていた。同じく b は、a の第 1 節を筆者が現代譜に書き直したものである。なお、角形ネウマの音価の解釈については諸説あるため、現代譜には音の長短を示す符尾・符鉤を付けていない<sup>(1)</sup>。

### 譜例1a 《聖ヨハネ讃歌》(*Liber Usualis* 1953, 1504)

Hymn.  
2.  
U

T que-ant laxis re-soná-re fíbris Mí- ra gestó-  
rum fámu-li tu-ó-rum, Sól-ve pollú-ti lábi-i re-á-tum,  
Sáncte Jo-ánn-es, 2. Núnti-us célso véni-ens Olýmpo,

### 譜例1b 《聖ヨハネ讃歌》の現代譜

Ut que-ant laxis re-soná-re fíbris  
Mí- ra ges-tó- rum, fá-mu-li tu-ó- rum,  
Sól- ve pol-lú-ti lá-bi-i re-á- tum,  
Sán- cte Jo-hán-nes.

歌詞の大意:しもべたちが、声帯をゆるめてあなたのみわざをたたえることができますように、彼らの唇から汚れを取り除いてください、聖ヨハネよ。

譜例1bの1～3段の、各前半と後半の冒頭、歌詞のイタリックで示した音節を取り出すと、“Ut, re, Mi, fa, sol, la”となる。これが、現在、使われている「ドレミファソラシ」の「ド」と「シ」を除く階名(音名として使用されることもある)の起源と考えられている。なお、現在でもフランス語では、ハ長調を“ut majeur”とするなど、音名として“ut”を用いている。

本稿では、この《聖ヨハネ讃歌》の歌詞と旋律について考察する<sup>(2)</sup>。

## 2. 洗礼者ヨハネ

### 2.1. 聖書

新約聖書<sup>(3)</sup>には2人の「聖ヨハネ」が登場する。ひとはイエスに洗礼を施した洗礼者ヨハネ<sup>(4)</sup>であり、もうひとはイエスの弟子の聖ヨハネ(使徒ヨハネ、福音記者ヨハネ)だが、全14節からなる《聖ヨハネ讃歌》の全体(後掲)を見れば、ここでのヨハネが前者であることがわかる。

福音書には、洗礼者ヨハネに関する記述が随所に存在する。彼の誕生については、『ルカによる福音書』1章5～22節と、同57～65節に詳細な記述がある。これは、概略、以下のような物語である。

老いた妻エリザベトに子供ができることを天使に告げられた祭司ザカリアは、その言葉に疑問を呈したために、話すことができなくなった。しかし、ヨハネが誕生した直後、再び話すことができるようになり、神を賛美した。

ちなみに、ヨーロッパ絵画には、聖母子(イエスとマリア)と共に、幼い洗礼者ヨハネが描かれたものがある。たとえばラファエロの《美しき女庭師 Bella giardiniera》、《牧場の聖母》、《ヒワの聖母》には、聖母マリアと幼子(おさなご)イエスとともに、幼子ヨハネ(上端が十字架状の細長い杖あるいは小鳥を持ち、ラクダの毛皮とおぼしき衣を身にまとっている)が描かれている。

『マタイによる福音書』3章には、成人した洗礼者ヨハネがラクダの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと蜂蜜を食べ物として、荒れ野で生活し、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と語り、ヨルダン川で人々に洗礼を施した事績が記され、イエスにも洗礼を受けたことが記されている。また同福音書11章11節には、イエスの言葉として「はっきり言っておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネよりも偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で、最も小さな者でも、彼よりは偉大である」との記述があり、イエスが洗礼者ヨハネを高く評価していたことが記されている。

これらの事績についても、多くの絵画が残されており、ヘラルド・ダヴィットの《キリストの洗礼》など、イエスに洗礼を受ける情景を描いたものが多い。

洗礼者ヨハネの最期については、『マルコによる福音書』6章、『マタイによる福音書』14章に記されている。これは、概略、以下のような物語である。

洗礼者ヨハネはヘロデ王が弟の妻ヘロデヤを娶ったことを非難した。当時のユダヤ教の教えに反するからだった。そこでヘロデは洗礼者ヨハネを捕らえて獄につないだ。さて、ヘロデは自分の誕生日の祝いに舞を舞ったヘロデヤの娘に、褒美に何が欲しいか尋ねた。娘はヘロデヤの指示によってヨハネの首を求めたため、ヘロデはヨハネの首を刎ねさせ、盆にのせて娘に与えた。娘はそれをヘロデヤに渡した。

このエピソードは、後にカラヴァッジョの《洗礼者聖ヨハネの斬首》など、多くの絵画の主題となった。またオスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』(1896 初演)はこのエピソードに基づき、ヘロデヤの娘の名を「サロメ」としたものである。さらにこの戯曲をもとに、リヒャルト・シュトラウスがオペラ《サロメ》(1905 初演)を書いている。「サロメ」という固有名詞は新約聖書には現れないが、ヨセフスの『ユダヤ古代史』18巻に「ヘロデとヘロデヤの娘」の名として現れる(ヨセフス 2000, 55)。ただし、ヨセフスは洗礼者ヨハネの処刑は、あくまで民衆の反乱を恐れたヘロデが政治的配慮から自ら命じたもの、としており、「ヘロデヤとの結婚を非難され、ヘロデヤの策謀で処刑した」という前述の物語は記されていない。

ちなみに、聖母マリアの誕生とその成長からイエスの誕生までを詳細に記述した新約外典『ヤコブ原福音書』19～20章には、マリアがイエスを出産した直後に、マリアが処女であることを確認した人物として「サロメ」なる女性が登場する(日本聖書学研究所 1976, 108-110)。

## 2.2. ヨセフス『ユダヤ古代史』

ヨセフスが著した『ユダヤ古代史』は、キリスト教徒以外の人物がイエスについて言及した同時代の資料として重視されてきた。その第18巻には、イエスと洗礼者ヨハネについて記されているが、邦訳者、秦剛平はイエスに関して以下の注釈を加えている。

六三一六四の、ナザレのイエスに関する記事は、ヨセフスの「キリスト証言」(Testimonium Flavianum)として有名。ある学者はこの記事の真実性を認め、ある学者はそれを否定する。またある学者はこの記事の一部に、後代のキリスト教徒による加筆ないし削除があると主張する。一六世紀以降論争はいまだつづいている。  
(ヨセフス 2000, 34)

他方、洗礼者ヨハネに関する記述に関しては、秦は以下のような注釈を加えている。

以下の洗礼者ヨハネに関する記事は、前出六三一六四のイエス(キリスト)についての記事とは異なり、一部の学者が後代の加筆のあることを認めるものの、多くの学者がその真実性を承認している。  
(ヨセフス 2000, 50)

秦の筆致は、読みようによっては「イエスに関する記述は信憑性が低い、洗礼者ヨハネに関する記事は信憑性が高い」と解釈できる。これは、いささか奇異な印象を与えるが、聖書を読み直してみると、洗礼者ヨハネの扱いに関して、いくつかの疑問が生じる。

たとえば、なぜ神の子であるイエスが洗礼者ヨハネの洗礼を受ける必要があったのか。なぜ、洗礼者ヨハネが「イエスの先駆け」であるということが随所で強調されているのか。『マタイによる福音書』3章13～15節の以下の記述も、ある意味、不自然といえる。

そのとき、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところに来られた。彼から洗礼を受けるためである。ところが、ヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った、「わたしこそあなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところに来られたのですか」。しかし、イエスはお答えになった。「今は止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです」そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。

(共同訳聖書実行委員会 1987, [新] 4)

さらに『使徒行録』19 章 1～5節には、以下の記述がある。

アポロがコリントにいたときのことである。パウロは、内陸の地方を通過してエフェソに下って来て、何人かの弟子に出会い、彼らに、「信仰に入ったとき、聖霊を受けましたか」と言うと、彼らは、「いいえ、聖霊があるかどうか、聞いたこともありません」と言った。パウロが「それなら、どんな洗礼を受けたのですか」と言うと、「ヨハネの洗礼です」と言った。そこで、パウロが言った。「ヨハネは、自分の後から来る方、つまりイエスを信じるようにと、民に告げて、悔い改めの洗礼を授けたのです。」人々はこれを聞いて主イエスの名によって洗礼を受けた。

(共同訳聖書実行委員会 1987, [新] 251)

これはパウロの時代においても、洗礼者ヨハネを指導者と仰ぐユダヤ教改革派のグループが存在していたことを示している。シモンは『原始キリスト教』で以下のように述べている。

とはいえ、エッセネ派は数ある教派の一つにすぎなかった。発足したキリスト教も、その中の一教派であり、同様に洗礼者ヨハネを中心とする一団や、ヨルダン河周辺に拠る種々の洗礼教派もまたそうであった。

(シモン 1964, 20)

また、20 世紀に発見された死海文書(死海写本)に関する『死海文書のすべて』において、ヴァンダーカムは、以下のように述べている。

比較研究の最初から、研究者はヨハネとその教え、およびクムランの人びとと彼らの教義の間の類似性を強調してきた。ヨハネはいくつかの理由から、クムランと接触をもったと思われる最右翼の候補者であるように思われた。(中略)クムランの宗団とヨハネの間で類似するものは、ヨハネをエッセネ派(クムランの一員)とする所までには至っていないが、それらは確かに示唆的であり、そのため一部の研究者は、洗礼者ヨハネとエッセネ派との関係を強く申し立てるに至っている。だが彼が実際クムラン共同体の一員であったとしても、またその場所を訪れたりしたことがあったとしても、彼は後になってそこを離れ、誰にも依存しない独自の宣教活動をつづけたのであろう。

(ヴァンダーカム 1995, 297-301)

これらの記述からすれば、洗礼者ヨハネが、当時、かなりの弟子あるいは信奉者を擁する、ユダヤ教改革派の指導者だったことが窺われる。

### 2.3. 『コーラン』

イスラム教の経典である『コーラン(クルアーン)』にも、イエスや洗礼者ヨハネが登場する。第6章「家畜」84～85節には「われらは彼にイサクとヤコブを与え、それぞれを導いた。また、それ以前にノアを導き、彼の子孫としてはダビデ、ソロモン、ヨブ、ヨセフ、モーセ、アロンを導いた。このようにわれらは、善行者には報いてやる。また、ザカリヤ、ヨハネ、イエス、エリヤをも。これらはすべて義しい人々であった。」(藤本 2013, 169)とあり、第3章「イムラーン家」38～41節と、第19章「マリヤム(マリヤ)」7～11節には、天使にヨハネの誕生を告げられた老ザカリヤがその言葉を信じなかったために、話すことができなくなる、という、前述の『ルカによる福音書』1章のエピソードに類似した記述がある。また、藤本他による『コーラン』の日本語訳第3章には以下の注がある。

『聖書』には聖母マリヤの両親の名前は見えないが、ムハンマドは、マリヤの父がイムラーンであると考えている。マリヤの子イエスとともに、ヨハネとザカリヤとがイムラーン家を構成する。

(藤本 2013, 53)

これは洗礼者ヨハネがイエスの親族だった、ということの意味しており、『コーラン』が両者の密接な関係を強調しているとみなせる。

#### 2.4. イエスカ、洗礼者ヨハネか

アームストロングは『神の歴史』において、福音書に記されたイエスの生涯から神話的要素を取り去るとどうなるか、という問題に関連して以下のように述べている。

イエスはバプテスマのヨハネという者の弟子であったように思われる。ヨハネはおそらくエッセネ派に属した放浪の禁欲主義者であった。彼はエルサレムの体制を絶望的に墮落したものと見なして、それを激しく非難する説教をしていた。彼は大衆に、悔い改めてヨルダン川で洗礼を受け、エッセネ派的な潔めの儀礼を受け入れるように迫っていた。

(アームストロング 1995, 117)

さらにウィルソンは『イエス — その生涯』の中で、以下のように述べている。

もしもパウロがアポロよりも弱い人間であったなら、あるいはパウロが書簡を書かなかったなら、当時の古代世界の人々の想像力を捉えた宗教は、イエスの洗礼ではなく「ヨハネの洗礼」だっただろう。そして、信者たちは「山上の垂訓」ではなく、「河岸の垂訓」を学ぶこととなっただろう。また彼らは、イエスの英雄的な最後の時の物語の代わりに、牢獄につながれ、首を斬られ、そして疑いの余地なく、死後、選ばれた弟子たちの前に出現した、という洗礼者ヨハネの物語を語り伝えたことだろう。この教団は、現代にあってはヨハネ派あるいは洗礼派として、新約聖書にはヨハネが神であることを示す疑いのない証拠がある、と信ずるまでに発展していたかもしれない。

(Wilson 1992, 103-4、筆者訳)

これはすなわち、イエスではなく、洗礼者ヨハネを救い主とするキリスト教が発展したかもしれない、という言説である。「歴史にもしもは厳禁」といわれるが、前述の聖書などの洗礼者ヨハネに関する記述を俯瞰して想像するに、一つの可能性として、以下のような状況を推測することは許されるだろう。

当時、ユダヤ教徒の間には様々な改革派のグループが存在し、中には原理主義的なグループも存在した。洗礼者ヨハネのグループも、ナザレのイエスのグループもそれらのひとつだった。やがてイエスのグループが教勢を拡大していく過程で、福音書が書かれた前後の時期に、イエスのグループがヨハネのグループを吸収する、あるいは合同するような動きが生じた。この時、ある種の妥協の産物として、あくまでイエスを神の子として認めるものの、洗礼者ヨハネをその先駆けと位置づけ、特別な地位を与えることによって、ヨハネのグループに対して、一定の配慮を図ることとなった。当然、ヨハネを排他的に信奉する一部の者たちは合同を拒否したであろうが、多くはイエスのグループへの合同を選び、以後、イエスを神の子とするキリスト者となっていった。その後、「イエスのキリスト教」が確固たる地位を獲得するにつれて、洗礼者ヨハネの存在は次第に後景に退いていった。

### 3. 《聖ヨハネ讃歌》の歌詞

#### 3.1. 聖務日課

カトリックの教会暦には多くの聖人の祭日が存在するが、そのほとんどが殉教の日である。しかし、洗礼者ヨハネに関しては、誕生の日(6月24日)と斬首の日(8月29日)が祭日として記念されてきた。誕生が祝われるのは聖人としては異例であり、洗礼者ヨハネに特別な地位が与えられてきたことを示している。

元来、《聖ヨハネ讃歌》は洗礼者ヨハネの誕生の日の聖務日課で読誦される祈祷文で、当初は現行の旋律(譜例1)を伴わなかったと考えられる。原文はラテン語で、4行14節からなる<sup>(5)</sup>。

1. Ut queant laxis resonare fibris mira gestorum famuli tuorum, solve polluti labii reatum, Sancte Iohannes.	しもべらがゆるやかな声帯で 御身の驚くべき行為を響かせることが出来るよう けがれた唇の罪を赦したまえ 聖ヨハネよ。
2. Nuntius celso veniens Olympo te patri magnum fore nasciturum, nomen et vitae seriem gerendae ordine promit.	高き天より御使いが来たりて 偉大なる御身が生まれることを 御身の名とその一連の生涯を 正しく御身の父に預言する。
3. Ille promissi dubius superni perdidit promptae modulus loquelaе, sed reformasti genitus peremptae organa vocis.	父は天からの預言を疑い 意のままに話す力を失った しかし御身は生まれると 失われた声の喉を直した。

4. Ventrīs obstruso positus cubili  
senserās regem thalamo manentem;  
hinc parens nati meritis uterque  
abdita pandit.

御身は閉ざされし母胎にあるとき  
寢室にいる王を察知した  
ここから両の親は子供の功德により  
秘密のことを明らかにする。

5. Antra deserti teneris sub annis  
civium turmas fugiens petisti,  
ne levi saltem maculare vitam  
famine posses.

御身は少年のとき民の喧騒を避けて  
荒野の洞穴におもむいた  
軽薄な会話でその生きざまを  
せめて汚すことがないように。

6. Praebuit hirtum tegimen camelus  
artubus sacris, strophium bidentes,  
cui latex haustum, sociata pastum  
mella locustis.

駱駝が剛毛の衣服を、羊が腰紐を  
聖なる体に与えた  
飲物は水であり食物は  
蜂蜜といなごであった

7. Ceteri tantum cecinere vatum  
corde praesago iubar adfuturum,  
tu quidem mundi scelus auferentem  
indice prodīs.

他の予言者達が予感の心で告げたのは  
ただの光の到来にすぎなかった  
ところが御身は世の罪を取り除くお方を  
指を指して明らかにした。

8. Non fuit vasti spatium per orbis  
sanctior quisquam genitus Iohanne,  
qui nefas saeculi meruit lavantem  
tingere lymphis.

広き世界の中でもヨハネに以上に  
聖なる人が生まれたことはない  
彼は世の罪を洗い清めるお方を  
水で濡らすを許された。

9. O nimis felix meritique celsi,  
nesciens labem nivei pudoris,  
praepotens martyr eremique cultor,  
maxime vatum!

ああ余りにも幸福で高き功德の人  
白い純潔の汚れ知らず  
いとも力ある殉教者にして隠遁の信奉者  
最大の予言者！

10. Serta ter denis alios coronant  
aucta crementis, duplicata quosdam,  
trina centeno cumulata fructu  
te, sacer, ornant.

三十の果実をつけた冠が、他の人達を飾り  
別の人達をその倍の果実の冠が飾る  
ところが聖者よ御身を飾るのは  
三百の果実を盛った冠なのだ

11. Nunc potens nostri meritis opimis  
pectoris duros lapides repelle,  
asperum planans iter et reflexos  
dirige calles,

最善の功德もて力ある御身は今こそ  
われらの胸の堅き石を除きたまえ  
起伏多き道をならし  
曲がれる小道を伸ばしたまえ

12. Ut pius mundi sator et redemptor  
mentibus pulsa livione puris  
rite dignetur veniens sacratos

世の優しき救い主かつ贖い主が  
邪念の去った清い人々の心に  
正しく聖なる足取りを置いて

ponere gressus.

かたじけなくも来給わんことを。

13. Laudibus cives celebrant superni  
te, Deus simplex pariterque trine,  
supplices ac nos veniam precamur,  
parce redemptis.

天の住民は御身を称賛し奉る  
一にして三位なる天主よ、  
われらもまた伏して許しを願い奉る  
贖われた者たちを容赦し給え。

14. Sit decus Patri genitaeque Proli  
et tibi, compar utriusque virtus,  
Spiritus semper, Deus unus, omni  
temporis aevo.

聖父および生まれし聖子に  
聖父と聖子との等しく両者の力なる聖霊よ御身にも、  
唯一の天主よ、常に栄光あれ  
いつの世にも

(小野田 2013)

*Liber Usualis* では、「洗礼者ヨハネの誕生」の聖務日課として、詩節 1~4、14 を第2晩課において、詩節 9~13 を賛課において、いずれも各節を 譜例1の旋律で歌うための楽譜が掲載されている (*Liber Usualis* 1953, 1497-99, 1504-1505)。

各詩節は、サッフォー詩体 Sapphic stanza により、11 音節3行と5音節1行の計4行からなる。

2~8節の内容は、福音書に記された洗礼者ヨハネの誕生、宣教、イエスの洗礼に関連し、9~14 節はやや抽象的に洗礼者ヨハネを讃えるものとなっている。

このラテン語テキストについて、ジュリアンは8世紀のものが現存しているとしている (Jullian 1907)。図版1は、11 世紀のダラム写本 Durham MS から転写された《聖ヨハネ讃歌》の冒頭を示している (Stevenson 1851)。タイトルは「洗礼者聖ヨハネの誕生の讃歌 Ymnus in Nativitate Sancti Johannis Baptistæ」となっており、上掲の《聖ヨハネ讃歌》全 14 節のラテン語テキストが、行間にアングロ・サクソン語の注釈を補った形で掲載されている。

図版1 《聖ヨハネ讃歌》、ダラム写本からの転写 (Stevenson 1851, 102)

## YMNUS IN NATIVITATE SANCTI JOHANNIS BAPTISTÆ.<sup>1</sup>

þæt hi magon tolætenū spegan æddrum  
Ut queant laxis resonare fibris  
pundra dæda þenas þinra  
Mira gestorum famuli tuorum  
tolys besmitenys peleres scylde  
Solve polluti labii reatum  
ó eala þu halga  
Sancte Johannes.  
bydel<sup>2</sup> of hean cumende rodore  
Nuncius celso veniens Olympho



### 3.2.『黄金伝説』

ヤコブス・デ・ウォラギネ(1230頃-1298)による『黄金伝説』81章「洗礼者聖ヨハネの誕生」には、《聖ヨハネ讃歌》の第1節にまつわる興味深い伝承が記されている。

ランゴバルド人の歴史家、ローマ教会の助祭、モンテカシーノの修道士であったパウルスは、あるときろうそくを聖別することになったが、いつもはなかなかのど自慢であったのに、急にのどがかすれて声が出なくなった。そこで、声が出ないように願って、聖ヨハネのために、「おお、おんみのしもべたちが、みわざをたたえる喜びの声を張り上げることができますように」という讃歌をつくった。この冒頭の詩句は、かつてザカリアに声もどったように、わたしにも声をもどしてくださいようにというパウルスの祈りなのである。

(ウォラギネ 1984, 324)

ここでいう「パウルス」とは、パウルス・ディアコヌス(あるいは「助祭パウルス」、720頃-799)と呼ばれる人物で、ノウルズは『中世キリスト教の成立』において、以下のように述べている。

アルクインという名前を聞くと、われわれはシャルルマーニュが才能ある人をどこかで見つけると、どこでも受け容れたり招いたりしたことに気づく。重要性においてかれに次ぐアーヘンの〈アカデミー〉の次の二人の構成員も、帝国の外から来た。モンテ・カシーノの修道士となり、聖ベネディクトゥスの修道会会則の有名な注釈書を書いたロンバルディア人パウルス・ディアコヌスは多方面にわたる学者で、中世に伝わる教父たちの説教からの抜粋文集成をつくったほか、ランゴバルド人の歴史やグレゴリウス大教皇の伝記を書いた。それに加えてかれは洗礼者ヨハネスに敬意を表してラテン語の聖歌中最大のもののひとつである「楽しく歌うことができますように」を作詞した。もうひとりの人オルレアンのアテオデュルフはイスパニアから追放された西ゴート人で…(以下略)

(ノウルズ 1981, 305)

これらの記述を信頼するなら、《聖ヨハネ讃歌》の歌詞はパウルス・ディアコヌスが創作したということになる。ただし、「声が出なくなったパウルスが、洗礼者ヨハネに祈ったところ、声が出るようになった」というエピソードは、歴史的事実というよりは、一種の奇蹟譚、説話、伝説と考えるべきだろう。

さて、声が出なくなったパウルス・ディアコヌスは、なぜ洗礼者ヨハネに祈ったのか。まず「洗礼者ヨハネが誕生したときにザカリアが話せるようになった」という、前述の福音書の記述が最大の理由と考えられる。また副次的には、モンテカシーノ修道院の特殊な事情にも関連する。この修道院は、聖ベネディクト(ヌルシアのベネディクトゥス、480頃-547)が現イタリアのカッシーノ市郊外に位置する岩山に建設したものだが、この修道院の創建について、佐藤彰一は『贖罪のヨーロッパ』において以下のように述べている。

(ベネディクトは)ごく少数の弟子を従えてモンテカッシーノの地におもむいた。五三〇年頃のことである。モンテカッシーノの小高い丘の上には、土地の住民の崇敬を受けていたアポロン神殿が建っていた。この事実は現代の考古学の発掘によっても確認されている。アポロンの神像を破壊した後の神殿には、聖マルティヌスを守護聖人とする教会を建設し、アポロンの祭壇の代わりに洗礼者ヨハネスに捧げられた礼拝堂が作られた。聖域であった森は開墾され、周辺住民は異教を捨ててキリスト教に改宗した。

しかし、この修道院は、577 年ごろに、南下してきたランゴバルド軍によって破壊されて廃墟となり、修道士は離散し、718 年に再興された(佐藤 2016、40-41)。パウルス・ディアコヌスの時代に、この修道院がどのような状態だったのか、詳細は不明だが、彼が蠟燭の聖別をしようとしたのは、洗礼者ヨハネに捧げられた聖堂だった可能性がある(この修道院は 883 年にはサラセン人によって再び破壊されている)。

さて、《聖ヨハネ讃歌》の第1節は、「声」に関わるものであり、聖歌を歌う後代の修道士たちにとって、靈験あらたかな祈りになったと想像される。たとえば、風邪を引いたり喉を痛めて声が出なくなった時には、この第1節を誦えれば、洗礼者ヨハネのとりなしで快復する、というような意味づけがなされたことだろう。このことが、後に修道士<sup>(6)</sup>に聖歌の歌唱を指導していたガイド・ダレッツォが、《聖ヨハネ讃歌》に譜例1の旋律を与え、初見視唱の能力を高めるために用いるようになった背景にあると考えられる。ただし、『黄金伝説』を著したウォラギネが、次に取り上げるガイド・ダレッツォよりも後世の人物である点には留意しておく必要があるだろう。

#### 4. 《聖ヨハネ讃歌》の旋律

##### 4.1. ガイド・ダレッツォ

ベネディクト会士、ガイド・ダレッツォ(991/992 頃-1050 頃)が書いたとされる『未知の聖歌に関する、修道士ミカエルへの書簡』には、《聖ヨハネ讃歌》に譜例1の旋律を付した楽譜(写本によって文字譜あるいはネウマ譜)が掲載され、「修道士たちに聖歌を初見で歌う能力を身につけさせるために用いる」という趣旨が書かれている(中世ルネサンス音楽史研究会 2018, 85-90)。このことから、現在では、一般に譜例1の旋律はガイドが創作(作曲)したものと考えられている(異説については後述)。

ところで、ガイドの時代には、音名については概ね以下の方式が使われていた。

##### 譜例2 中世の音名表記の一例

The image shows two musical staves. The bottom staff is in bass clef and contains the following notes and letter labels: G, A, B, C, D, E, F, G, a, b, b. The top staff is in treble clef and contains the following notes and letter labels: c, d, e, f, g, a, b, b, c. The letters are placed below the notes.

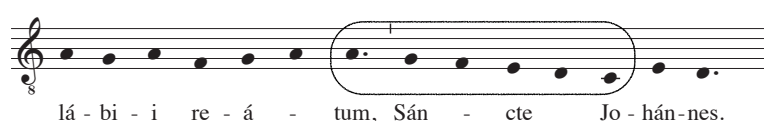
この方式では、現代とは異なり、イ〜ト音(A-G, a-g)でオクターブを区分する。もともとは最低音としてイ音を“A”とし、アルファベット順に音名を配列していたが、のちに“A”の下にト音が追加され、これ



第2行前半(Mira gestorum)は、2度、3度からなる基本的な動きであるが、第2行前半から後半にかけて、終止音 D から F への短3度跳躍(gestorum-famuli)、第2行末から第3行にかけて D-G の完全4度跳躍(tuorum-Solve)、第3行前半から後半にかけて D-A (polluti-labii) の完全5度跳躍が現れる。跳躍進行を初見で歌うのは、順次進行にくらべて難易度が高いため、このような規則的な跳躍音程の連続は、初見の能力を高めるために有益と考えられる。ただし、このような音の高まりや跳躍進行は、音楽的表現としての「高揚感」をもたらすものでもあり得る。

第2行末から第3行(reatum...Johannes)にかけて、A-G-F-E-D-C の下行音階が現れる(譜例6)。これは音階の音程感を獲得するために有益と考えられる。ただし、このような下行音階は、音楽の終結部として、ごく自然なものともいえる。

#### 譜例6 《聖ヨハネ讃歌》第3行後半～第4行



以上、確認してきたように、この《聖ヨハネ讃歌》の旋律には、音程感を身につけ、楽譜を見て、未知の聖歌を歌うソルフェージュ能力、即ち、初見視唱の能力を高めるために役立つ特徴が散見される。しかし、この聖歌を全体として見た場合、単旋律聖歌としてさほど特殊なものではなく、したがって、この旋律がガイド以前から存在しており、ガイドがその教育的効果に着目して用いた、という可能性も排除できない。

#### 4.2. ホラティウスの頌詩

モンペリエ大学医学部図書館所蔵の写本 H425 には、ホラティウス(B.C. 65 - B.C. 8)の『頌詩』4巻11番“Est mihi nonum superantis annum”(私には9年以上寝かせたアルバ産ワインの壺がある)のアクタニア・ネウマによる単旋律世俗歌が掲載されている。この筆写譜の旋律は、譜例1の旋律とほぼ同じものである。また、このホラティウスの頌詩(全9節)は、“Ut queant laxis”と同じく、11音節3行と5音節1行からなる sapphic 詩体で書かれている。

フランスの作曲家・音楽学者、シャイエによれば、1852年にクスマケールがこの筆写譜の成立年代を10世紀とし、ガイドはこの世俗歌の旋律に“Ut queant laxis…”の歌詞をあてはめた、との説を唱え、その後も同様の主張が複数の研究者によってなされてきたという。しかし、シャイエは内的・外的観点からこの写本と音楽そのものを綿密に検討し、この筆写譜は11世紀末に成立したもので、ガイドの旋律にホラティウスの頌詩をあてはめたもの、と結論づけている(Chailley 1984, 53-57)。

他方、ライアンズ(Lyons 2007)は、詩のみならず、H425の旋律もホラティウスが創作したものである、と主張している。しかし、この主張には裏付けが乏しく、実証的観点からはいささか疑問がある<sup>(8)</sup>。

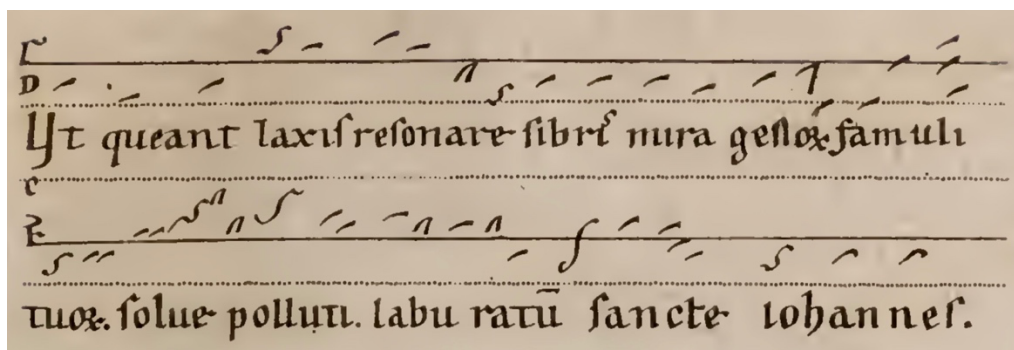
とはいえ、H425の成立年代がシャイエが主張するようにガイド以後であったとしても、元になった古い写本が存在していた可能性もあり、ガイドがH425の世俗歌の旋律を借用した、という説は依然とし

て若干の可能性を残している。また、今は失われた共通の起源が存在した可能性もある。今後、この問題に光を投じる、なんらかの資料が発見されることを期待したい。

#### 4.3. 他の旋律

ドイツの神学者・歴史家・音楽著述家、マルティン・ゲルベルト(1720-1793)の『聖歌と聖なる音楽について』第2巻(Gerbert 1774)にはガイドについての記述があり、45 ページの上部には以下のネウマ譜が掲載されている(譜例7a)。

譜例7a 《聖ヨハネ讃歌》の異稿(Gerbert 1774, 45)



このネウマ譜は、点線と実線の2種の譜線を用い、ザンクト・ガレン系ネウマで記譜されている。歌詞は《聖ヨハネ讃歌》の第1節“Ut queant laxis...sancte iohannes”だが、旋律は全く別のものである。ミヤエル・ヘルメスドルフ(1833-85)によるガイドの『未知の聖歌に関する、修道士ミカエルへの書簡』のドイツ語対訳書(Hermesdorff 1884, 21)の注に、このネウマ譜を、4線譜、角型ネウマに書き換えた楽譜が掲載されている(譜例7b)。譜例7cは、このヘルメスドルフの楽譜を筆者が現代譜に書き換えたものである。

譜例7b 《聖ヨハネ讃歌》の異稿、譜例7a のヘルメスドルフによる書き換え



譜例7c 《聖ヨハネ讃歌》の異稿、譜例7b の現代譜



Ut que - ant la - xis re - so - na - re fi - bris,  
 Mi - ra ge - sto - rum fa - mu - li tu - o - rum,  
 Sol - - - ve pol - lu - ti la - bi - i re - a - tum,  
 Sanc - te Jo - an - nes.

この聖歌は、E音を終止音とするフリギア旋法とみなすことができる。ここで注目されるのは、歌詞の“Mi, fa, Sol, la”の各音節に、それぞれ E, F, G, A 音が対応している点である。

ヘルメスドルフは、この旋律をガイド以前のものとしているが(Hermesdorff 1884, 20)、もしそうだとすれば、ガイドは、この譜例7の聖歌から“Ut, re, Mi, fa, Sol, la”に C, D, E, F, G, A の各音を対応させる着想を得て、譜例1の旋律を創作した、という仮説が成り立つ。

なお、このゲルベルトの著作では譜例7aと同じ45ページの下に、一部、異同があるものの(“Labi”の上のD)、譜例1の“Ut queant laxis”の一種の文字譜が掲載されている(図版2)。

図版2 《聖ヨハネ讃歌》の文字譜(Gerbert 1774, 45)

C D F DE D D D C D E E  
 UT queant laxis REsonare fibris  
 E F G E D E C D F G a G F E D D  
 MIRA gestorum FAMULI tuorum  
 G a G F E F G D a D G a F G a a  
 SOLve polluti LABII reatum  
 G F E D C E D  
 Sancte Iohannes.

歌詞の上に小さく記された“C D F”等のアルファベットは音名を表している(譜例2参照)。この図版2の前後のゲルベルトの記述はガイドの書簡に関するもので、譜例7aについては言及されていない。ひとつの推測として、譜例7aの箇所には、本来は図版2に対応する古いネウマ譜が置かれるはずだったが、当時の編集者あるいは出版業者がネウマ譜を理解できなかったために、単に歌詞のみ“Ut queant laxis…”であることを確認し、譜例7aを誤って掲載した、という事情が考えられる。あるいは、ゲルベルトは、《聖ヨハネ讃歌》に、ガイドとは異なる旋律が存在していたことを、ネウマ譜が読める読者にのみ、示したかったのかもしれない。

他方、ハービンソンは、1887年にパリで刊行された聖務日課集に掲載されている、譜例1とは異なる旋律による《聖ヨハネ讃歌》第1節の現代譜を挙げている(譜例8)。この旋律は譜例1と同じく、第2旋法(ヒポドリア)であり、また、“resonare”がDに、“famuli”がFに対応しているが、譜例1に比べると、やや変化に乏しい旋律に思える。この旋律の成立年代は不明で、擬古的に作られた後代の旋律の可能性もあるが、《聖ヨハネ讃歌》が、地域、時代によって異なる旋律で歌われてきたことを示しているといえるだろう。

譜例8 《聖ヨハネ讃歌》の異稿(Harbinson 1971,57)、筆者による転写

Ut que - ant la - xis (re) - so - na - re fi - bris

Mi - ra ge - sto - rum (fa) - mu - li tu - o - rum

Sol - ve pol - lu - ti la - bi - i re - a - tum

San - cte Jo - an - nes

5. 「シ」から「ド」へ

グイド以後、“ut, re, mi, fa, sol, la”の6音音列(ヘクサコルド)による階名唱が普及した。この方式では、E-FとH-Cの半音が常に“mi-fa”となるように読み替えを行なった。やがて“ut”がCに固定され、音階の第7音(H)の呼称として“si”が用いられるようになる。この“si”の使用は1609年のカルヴィシウスの著述に現れ、“do”は1645年のギベリウスの著述に現れる(藺田 1982, 1392)。また、ヴァールラント(ca1517-1595)が“si”と“do”を加えてヘクサコルドをオクターブ音階に拡張したともいわれる(Weaver 1982, 97)。ただし、これらの階名としての“ut, re, mi…”は音楽理論のためのものではなく、あくまで音楽実践において使用されたものであるため、ギベリウスやヴァールラントが記述する以前から使用されていた、と考えるべきだろう。

さて、“si”について、まず思い浮かぶのは《聖ヨハネ讃歌》第1節の最後の“Sancte Johannes”である。ラテン語では、しばしば“J”の代わりに“I”が用いられ、“Johannes”は“Iohannes”とも綴られたから、“si”は“Sante Iohannes”の省略形とみなせる。そして、“si”が洗礼者ヨハネに由来するなら、“do”は「主=イエス」を意味する“Dominus”に由来する、という推論が成り立つ。現在、長音階の第7音の“si”は、短2度上行して主音である“do”に向かうことが多く、この性質から「主音を導く音」という意味で「導

音」と呼ばれる。これには「主イエスを導く洗礼者ヨハネ」が重なり合う。ただし、“do”については、“ut”では発音しにくいので、発音しやすい“do”になった」とする説もある(藺田 1982, 1392)。

## 6. おわりに

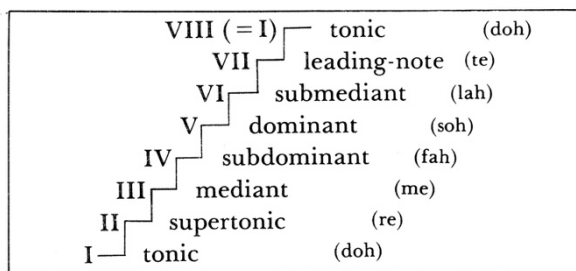
映画『サウンド・オブ・ミュージック』の挿入歌《ドレミの歌》の原詩(英語)では、第7音は“si”ではなく“te”となっている。これは、19世紀にイギリスで始まったソルミゼーションの一種、トニック・ソルファに由来すると考えられる。渡(1982)は以下のように述べている。

トニック・ソルファの方法は、「移動ド唱法」を基礎としており、音高に関してはゲイード・ダレッツォのシラブル do, re, mi, fa, sol, la, si を応用して英語風に doh, ray, me, fah, soh, lah と綴り、第7音の si は te(ティ)に変えている。これは頭文字だけで略記するとき sol と si の s が重複するのを避けるためである。こうして長調の音階は d, r, m, f, s, l, t で表される。

(渡 1982, 1635)

現在、英語圏では、階名としてトニック・ソルファを用いることがあるようだ。たとえば、イギリスの中等教育用教科書、ベネット著『音楽通論』(Benette 1984)では、音階の第1音から第7音の階名として、“doh, re, me, fah, soh, lah, te”を挙げている。

図版3 音階音の名称(Benette 1984, 12)



他方、イタリア、フランスなどヨーロッパ諸国やわが国の音楽界や音楽教育においては、省略形であるとはいえ、洗礼者ヨハネの名に由来する“si”が音名あるいは階名として広く用いられている(城元 2009)。《ドレミの歌》の訳詞で筆者がなじみがあるのは「シはしあわせよ」だが、これは「聖ヨハネが幸せをもたらす」と解釈できる。訳者がそこまで認識していたかどうかは別として、結果的には《聖ヨハネ讃歌》の本来の主旨を含意する訳といえるだろう。

注:

(1) カトリックにおいては、中世のグレゴリオ聖歌の歌唱の伝統はその後衰微し、19世紀に復興されたという経緯がある。特に音価、リズムの扱いについては、中世の歌唱法が受け継がれているとは言い難く、多くの議論がなされてきた。現在、一般にカトリックではグレゴリオ聖歌を拍節リズムなし、自由リズムで朗唱風に歌うことが多い(いわゆるソレム唱法)。そのため、この聖歌の録音資料も、自由リズムによる演奏が圧倒的に多いが、拍節リズム(リズム・モード)で歌った稀な例として、Ruhland (1994)がある。



- (2) “Hymnus”は祈祷文(文字テキストのみ)を意味する場合と、旋律を伴う聖歌を意味する場合とがある。また前者であっても、単に朗読されるだけでなく、いくつかの音高で読誦されたり、即興的に旋律を付けて朗読される場合もあったと考えられる。一般に「讃歌」と訳されるが、ここでの「歌」は広義に解釈する必要がある。
- (3) 以下、新約聖書からの引用は共同訳聖書実行委員会(1987)による。
- (4) カトリックでは「洗礼者聖ヨハネ」と呼ばれ、他に「洗者ヨハネ」、「バプテスマのヨハネ」とも呼ばれるが、本稿では「洗礼者ヨハネ」を用いる。
- (5) 便宜上、各節に通し番号を付した。
- (6) 中世のベネディクト会には「幼児献納 *pueri oblati*」という制度があり、富裕な家柄、あるいは貧しい家柄の子供が幼少期から修道院に託されることがあった(佐藤 2016, 37-38)。変声前の少年は、しばしば聖歌隊で現在のソプラノに相当するパートを受け持ったから、ガイドは、このような少年聖歌隊員の歌唱指導も行ったと考えられる。
- (7) 詳細は、中世ルネサンス音楽研究会(2018)を参照。
- (8) ライアズの研究に基づき、H425 の“*Est mihi nonum...*”をリュート伴奏のバリトン独唱で演奏したCD がリリースされている(Gabbitas 2007)。2021 年 9 月現在、Amazon Music などの音楽配信で聴くことができる。

#### 【参考文献】

- Apel, Willi. 1972. *Harvard Dictionary of Music*. Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press.
- Baker, Theodor. 1923. *A Dictionary of Musical Terms*. New York: AMS Press.
- Benette, Roy. 1984. *General Musicianship* (Cambridge Assignments in Music). Cambridge: Cambridge University Press.
- Chailley, Jacques. 1984. “*Ut queant laxis et les Origines de la Gamme*” in *Acta Musicologica* Vol. 56, Fasc. 1, pp. 48-69.
- Gabbitas, Christopher (baritone) and David Miller (lute). 2007. *The Mystery of Do-Re-Mi*. Signum Classics SIGCD098 [CD]
- Gerbert, Martin. 1774. *De Cantu e Musica Sacra*. Vo. 2, St. Blasien: n. p.  
[[https://imslp.org/wiki/De\\_cantu\\_et\\_musica\\_sacra\\_\(Gerbert%2C\\_Martin\)](https://imslp.org/wiki/De_cantu_et_musica_sacra_(Gerbert%2C_Martin))] (2021 年8月1日閲覧)
- Harbinson, Denis. 1971. “The Hymn ‘*Ut queant laxis*’” in *Music & Letters*, Vol. 52, No. 1(Jan., 1971), pp.55-58. Oxford: Oxford University Press.
- Hermesdorff, Michael, trans. 1884. *Epistola Guidonis Michaeli Monacho de ignoto cantu directa = Brief Guido's an den Mönch Michael über einen unbekanntes Gesang*. Trier: Druck und Commissions-Verlag der Paulinus-Druckerei.  
[<https://archive.org/details/epistolaguidoni00hermgoog/page/n5/mode/2up>] (2021 年8月1日閲覧)
- Julian, John, ed. 1907. “*Ut queant laxis resonare fibris*” in *Dictionary of Hymnology* Vol. 2, pp. 1202-1203. London: J. Murray.
- Liber Usualis: Missæ et Officii*. 1953. Tournai: Desclée & Co.
- Lyons, Stuart. 2007. *Horace's Odes and the Mystery of Do-Re-Mi*. Exeter: Short Run Press.

- Palisca, Claude V. 1980. "Guido d'Arezzo [Artinus]" in *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 7: 803-807. London: Macmillan.
- Ruhnke, Martin. 1955. "Solmisation" in *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*. 12: 845-851. Kassel: Bärenleiter-Verlag.
- Ruhland, Konrad (cond.) 1994. *Gregorian Chant*. Sonny Classical SK 53 899. [CD]
- Serwer, Howard. 1980. "Martin Gerbert" in *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 7: 249-250. London: Macmillan.
- Stevenson, Joseph ed. 1851. *The Latin Hymns of the Anglo-Saxon Church, with an Interlinear Anglo-Saxon Gloss*. Durham: George Andrews.
- Weaver, Robert. 1980. "Waelant, Hibert." in *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*. Vol. 20, pp. 97-99.
- Wilson, A. J. 1992. *Jesus: A Life*. New York: W. W. Norton and Co.

- アームストロング、カレン 1995 『神の歴史』高尾利数訳 東京：柏書房 (Armstrong, Karen. 1994. *A History of God: The 4000-Year Quest of Judaism, Shristianity and Islam*. New York: Alfred A. Knopf)
- ヴァロワ、ジャン・ド 1999 『グレゴリオ聖歌』(水嶋良雄訳) 東京：白水社 (Valois, Jean de. 1963. *Le Chant Grégorien* . Collection QUE SAIS-JE? No. 1041. Paris: Presses Universitaires de France.)
- ヴァンダーカム、ジェームス・C. 1995 『死海文書のすべて』秦剛平訳 東京：青土社 (VanderKam, James C. 1994. *The Dead Sea Scrolls Today*. Grand Rapids, Michigan: Wm. B. Eerdmans Publishing Co.)
- ウォラギネ、ヤコブス・デ 1984 『黄金伝説2』前田敬作、山口裕(訳) 東京：人文書院 (Voragine, Jacobus de . *Regenda aurea*.)
- 小野田圭志 2013 『聖ヨハネの有名な Ut queant laxis resonare fibris という賛歌』  
[<https://blog.goo.ne.jp/thomasonoda/e/83bb764d42e6267ba793bece52cdd2a8>](2021年9月18日閲覧)
- 共同訳聖書実行委員会 1987 『聖書 新共同訳』 東京：日本聖書協会
- 佐藤彰一 2016 『贖罪のヨーロッパ——中世修道院の祈りと書物』(中公新書 2409) 東京：中央公論社
- シモン、マルセル 1964 『原始キリスト教』久米博訳 東京：白水社 (Simon, Marcel. 1952. *Les premiers Chrétiens*. Collection QU SAIS-JE? No 551. Paris: Presses Universitaires de France.)
- 城元智子 2009 「ヨーロッパ諸国における読譜指導とソルミゼーション」 日本音楽教育学会『音楽教育実践ジャーナル』7巻1号 :42-54
- 藪田誠一、渡鏡子 1982 「ソルフェージュ」の項 『音楽大事典』第3巻 1391-1392 東京：平凡社  
中世ルネサンス音楽史研究会(訳) 2018 グイド・ダレッツォ(著)『マイクログス(音楽小論)』 東京：春秋社
- 日本聖書学研究所(編) 1976 『聖書外典偽典6 新約外典 I』 東京：教文館
- ノウルズ、M. D. 1981 『中世キリスト教の成立』(キリスト教史第3巻) 上智大学中世思想研究所(編訳、監修) 東京：講談社 (Knowles, M. D. and Dimitri Obolensky. 1969. *The Christian*

*Centuries, A New History of the Catholic Church vol. 2, The Middle Ages.* London: Darton Longman & Todd)

- ハスキンス、C.H. 1985 『十二世紀ルネサンス』野口洋二訳 東京:創文社 (Haskins, C. H. 1927. *The Renaissance of the Twelfth Century.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press)
- 藤本勝次、伴康哉、池田修(訳) 2013 『コーラン I』(中公クラシックス E6)第4版 東京:中央公論社
- ヨセフス、フラウィウス 2000 『ユダヤ古代誌 6』 秦剛平訳 東京:筑摩書房
- ワースベルヘ、ヨセフ・スミツ・ヴァン 1986 『音楽教育』 東京:音楽之友社 (Waesberghe, Joseph Smits van. 1969. *Musikerziehung: Lehre und Theorie der Musik im Mittelalter.* Leipzig: VEB Deutscher Verlag für Musik.)
- 渡鏡子 1982 「トニック・ソルファ」の項 『音楽大事典』第4巻:1633-1636 東京:平凡社

PDF version rev. 1.2 220421

初出:『聖徳大学言語文化研究所 論叢』第29号、2022.